

モダニティと複数形の「子ども」

—特集「子どもらしさ」へのアプローチ3 多様な子ども」
のねらいに代えて—

元 森 絵里子

1. 本特集の主旨

1993年の日本教育社会学会大会ラウンドテーブル「子ども社会学の構想」から立ち上がった本学会は、既存の教育的ないし大人中心主義的なそれではない形で、子どもたちの文化や社会を捉える視角を模索してきた。そのなかで、「子ども」とは何か、「子ども」にアプローチするとはいかなることかという視角や方法論をめぐる学際的対話が行われてきた。

本紀要第22、23号の特集「子どもらしさ」へのアプローチ」は、「子どもらしさ」「子ども性」を鍵概念とすることで、社会学、心理学、人類学、保育学、児童文化学等の多様な立場から、これを改めて問い直す試みであった。「子ども（らしさ）」に関する既存の論に思想的検討を加えて、「子ども（らしさ）」に学術的・実践的にアプローチするための視角・思想を探ろうとする研究もあれば（鵜野論文、加藤論文、師岡論文など）、実態として子どもたちの世界を探求する視角を示した論考もあった（田中論文など）。子どもたちには「子ども」としての特徴（「子どもらしさ」）があると仮定して、それにどのような視角と方法で働きかけるかや、それをどのような視角と方法で明らかにするかという接近方法が探られていると言えよう。

特集の巻頭言（加藤理）では、本学会設立時の理論的支柱として藤本浩之輔先生と深谷昌志先生の名前があげられている。共に教育的ないし大人中心主義的まなざしを問い直し、大人の論理ではない、子どもたち自身の論理に基づき

彼ら自身の手によってなる文化・宇宙・社会等を問おうとする研究視角を打ち立てたが、「子どものコスモロジー」という鍵概念で新たな子ども理解を探求しようとした藤本と、質問紙調査に代表される実証的な手続きで子どもたちの生活実態を明らかにしようとした深谷では、やや道行きが異なってもいる。特集は、このようなずれつつも重なる、学会初期からの「子どもらしさ」へのアプローチの先にある今を見せてくれている。

ただ、同時に興味深いのは、「子どもらしさ」とは何か」という、ややもすれば本質主義的・固定的に「子ども」を定義しかねない特集の問いへの応答として、本質論を回避し、「子どもらしさ」のイメージが関係性や文脈の中で構築されたり作用したりする様に目を向けた研究もあったことである。たとえば、南出論文は、グローバルに共有される「子どもらしさ」のイメージがローカルな文脈に置かれたときに生じる葛藤に、池田論文は、「子どもらしさ」に関する本質主義的な見方がときに逆説的な機能を伴って子どもたちに作用する様子に、目を向ける必要性を教えてくれる。これらは、「子どもらしさ」なるものがあるとしてそれにアプローチするのとは異なり、「子ども」というテーマにつきものの「子どもらしさ」に関する規範的な前提が、現実の文脈・関係性において、その社会や現実の子どもたちとの間でどのように機能しどのような葛藤をもたらすのかという点への批判的視座も含んだ、関係論的・構築論的なアプローチをとっている。このような視角が、特集「子どもらしさ」へのアプローチにさらなる広がりをもたらしたことは疑いない⁽⁴⁾。

本第 24 号の特集では、ここに、「多様な子ども」に子ども（社会）研究はどのようにアプローチするのかという問いを加えてみたい。

「子ども」の探求は、一般化・標準化された、ないし、理想や規範としての「子ども」を想定してなされることも多かった。だが、今、社会的にも学術的にも、子どもが多様であることへの注目が高まっている。たとえば、貧困や差別、開発途上国の子どものように古くて新しい問題もあれば、性的マイノリティや外国にルーツを持つ子、発達障害のような、新たな概念や制度・実態の変化とともに可視化されつつあるテーマもある。サポート校やフリースクール、児童養護施設など、非典型的な養育・教育経験を考える研究も増えてきている。さらには、典型的・一般的と見られてきたような子どもたちの世界にもたらされた、

社会意識的・技術的・制度的な変化にも注目が集まっている。

そこでは、多様な子どもたちの実態が報告されると同時に、それらと典型的・一般的な「子ども」像との間に生じる葛藤が指摘されている。また、子ども・教育分野も含めて、むしろ新たな規範として「多様性」や「共生」が積極的に説かれることも少なくなっているが、それらの可能性や限界を考えようとする研究もある。だが、こういった研究群は、ともすると、近いテーマ、近いディシプリンで部会にまとめられ、互いも、また「子ども」一般へのアプローチを探求する研究群とも、交わらない傾向がなかっただろうか。

そこで、あえて「多様な子ども」という大まかな枠を仮置きして、テーマで分断されがちな、多様な／多様性を志向する、子ども期／子ども観／子どもたちに関する論考を集めることで、「子ども」とは何か、「子ども」にアプローチするとはいかなることかについての、新たな対話を開ききっかけとしたかった。いわば、「多様な子ども」に子ども（社会）研究はどのように取り組むのかという問いを加えてみたいのである。

もちろん、この仮枠の功罪はあり、「多様」も、「子ども」も、前提として強く置きすぎると問題がある。各論考の中でも示唆されるが、昨今強調される「多様性」に、「主流」「典型」に対する「非主流」「非典型」の言い換えになっていたり、逆に、社会的強者の思想と等価であったりする部分がないとは言えない。また、「子ども」というカテゴリー自体が自明ではない。「子ども」というカテゴリーや「子ども／大人」という対が、存在しなかったり他より重視されなかったりする時代・社会・局面は多々あろう。ただ一方で、「子どもらしい子ども」という前提が未だ社会の各所で置かれ、社会的に機能していることも事実である。そこからの偏差として「多様」な層が把握され、その包摂／排除をめぐる葛藤があったり、「多様性」を新たな価値として称揚する際に、既存の「子どもらしい子ども」イメージと綱引きがあったりする。そういった点を含めて見ていくことに、さしあたり意味はあろう。そのための、後に批判・解体され乗り越えられていく可能性も含めた仮の枠組みとして、「多様な子ども」を議論の暫定的な括りとして設定して、「子どもらしさ」へのアプローチの対話を広げていくことに賭けてみたい。

本特集の各論文は、それぞれの形で、現実には様々な子がいるなかで、「多

様性」も含めた「子ども」像や「子ども」へのアプローチをめぐる、様々な葛藤や緊張関係があることを見せてくれているように思われる。これらをきっかけに、学会内外でさらなる議論が広がっていくことを期待したい。

2. モダニティと多様な子ども

さて、特集主旨説明としては以上で十分かもしれないが、もう少し敷衍したい。過去 2 回の特集と本特集とを架橋し、日ごろ一堂に会することが少ない、それぞれにテーマの異なる「多様な子ども」へのアプローチを試みた各論考間をゆるやかにつなぎとめ、さらなる対話へと開く作業となることを期待して、筆者が不用意に「多様な子ども」というテーマを発案し（結果として特集企画者となる羽目になっ）た際に念頭に置いていた、日本や欧州の研究潮流に関する問題意識を説明したい⁽²⁾。したがって、以下は、編集委員会の総意ではなく筆者個人の見解である。

「多様な子ども」は、英語にすれば、**diverse childhoods** である。**childhood** は、「子ども期」「子ども時代」が定訳になってしまっているが、本来、「子ども期」のほかに、「子ども性」「子どもらしさ」「子どもなるもの」といった意味を含む単語である。抽象的にこれらを表す際には不可算名詞であるが、欧州の、主として「新しい子ども社会学」と呼ばれる研究潮流以降、子ども期を固定的・一枚岩・普遍的なものとして捉えようとする構図が反省され、個別具体的な **childhood** をそれぞれにそれ自体重要なものとして見たり、文脈や関係性の中で **childhood** が多様に現出する可能性を視野に入れたりする志向性を示すために、あえて複数形の **s** を（ときに **childhood(s)** などと表記しつつ）付与することがゆるやかに共有されている。この複数形の「子ども」という問題提起が必要ではないかというのが出発点である。

もちろん、先述の「多様」概念の問題を踏まえれば、視角を示す概念としては、単に複数形の **childhoods** でもいいのかもしれない。アリエス『〈子供〉の誕生』（Ariès 1960=1980）を引くまでもなく、子どもに対する感覚は歴史的・文化的に可変的なものである。ただ、これも先述のように、まさに批判の対象である子ども期を固定的・一枚岩・普遍的なものとして捉えようとする構図が力を持って

きたこと自体を、記述の対象に自覚的に加える必要があるのではないかと思うのである。

アリエスを嚆矢とする社会史の知見が明らかにしてきたように、モダニティ(近代・現代)において、生物学、医学、衛生学、心理学、社会学等の知に支えられながら、「発達」「社会化」といった子ども観が、あたかも普遍的な子ども理論かのように力を持ったこともまた事実である。ヨーロッパ系の言語で、不加算名詞の *childhood* が用いられ、集合名詞 *children* のほかに定冠詞付きの *the child* (子どもなるもの) にあたる語すら使われてきたことを考えれば、複数形でありえる子ども期・子どものあり方 (*childhoods*) を、あたかも普遍的かのように流通する「定型」「主流」の「子ども(らしさ)」イメージ (*childhood*) の強さと、「子ども」というカテゴリーをあてはめないケースも含む多様な年少者のあり方の、両極を念頭に置きつつ見るほうがよいように思われる。

新しい子ども社会学を内部から乗り越えようとしたアラン・プラウト『これからの子ども社会学』(Prout 2005=2017) は、近代的な子ども観・子どもへのアプローチにつきものの、子ども/大人、構造/エイジェンシーといった近代的な図式(二分法)を問い直している。このような図式では多様化する現代社会の子どもを捉えられないという主張で始まる同書は、(著者自身の書き方に曖昧な部分があることは否めないのだが)「子ども」をめぐるモダニティそのものを描き直す視角を示唆してくれる。プラウトは、科学を題材としたラトゥールの『〈虚構〉の近代』(原題は「私たちは近代だったことはない (We have never been Modern)」)を参照しているが、「子ども」(*childhood*)とは何か(つまり、「大人」「人間一般」とは何が異なるのか)を二分法を駆使して確定しようとする近代のプロジェクトは、現実には実現したことはない。現実の子どもたちは常に多様であり、「子ども/大人」の区分は曖昧なのである。

近代社会には、「子ども」を確定しようとする力学と共に、多様な子ども観・子ども期 (*childhoods*) が並存している。プラウトは、モダニティの「子ども」を、異種混淆のネットワークによってなる複数形の *childhoods* として描き直すことを提案しているが、この問題提起を受けてさらにこの理論枠組みをより精緻に展開するならば、*childhoods* が複数形だと主張するだけでは不十分である。制度化され普遍化されようとする「子ども」観と、そこからこぼれ落ちる年少

者のあり方との関係を見て行く必要があるのではないだろうか。

同じことをさらに別の形で言うために、子ども史におけるアリエス以降の社会史の、近代以前に「子ども」への近代的心性が本当になかったのか否かをめぐる混乱を整理する、カニンガム (Cunningham 2005=2013) とその邦訳の用語系を借用しよう。カニンガムは、規範・理想 (観念) としての子ども観 (childhood) と、実態・現実としての子どもたち (children) という区分を導入している。それによれば、概ね 18 世紀ごろから 20 世紀半ばにかけて、モダニティ (近代・現代) は、特定の子どもの観を生み出し、そこに包摂される年少者を実態として拡大していった。

ロックやルソーらの教育思想が現れ、モラリストが教育実践を行い、ロマン主義が子どもの価値を歌い上げたように、「大人」(近代的個人) に対置されながら、「大人」になっていくことを想定された、「子ども」に関する思想が積み重なっていく。そして、19 世紀には、欧米の各地で、近代家族と近代公教育制度を軸に、子どもたちを、身体的に保護され、愛情と厳しさ——アリエスの言葉では「可愛がり」と「激昂」——を糧に成長するという規範の世界に包摂する諸制度ができあがっていく。未だ包摂されきらない子どもたち (children without childhood) の包摂のために、児童福祉や保健衛生や少年司法の諸制度の網の目——ドンズロ (Donzelot 1977=1979) の言葉では「保護複合体」——ができあがり、実態としても子どもらしい子どもたち (children with childhood) を増やしていくこととなった。

つまり、モダニティは、ある範囲の「子ども (らしさ)」イメージを、普遍的かのように現実の子どもたち (children) や子ども期 (childhoods) に広めていく力学をはらんでいたと考えられる。その意味で、規範・理想としての近代的子ども観 (childhood) と実態・現実としての多様な子ども期・子どもたち (childhoods, children) は、単に旧来の枠組みと新しい枠組みとして対置されるものではない。年少者のあり方は常に複数形である。そのことを前提とした上で、モダニティにおいて、ある「子ども」のあり方が規範・理想として普遍化し実体化する傾向にあることも、議論に組み込む必要がある。

以上のような観点から、普遍的かにも見える「主流の子ども」を含みつつそれに対置される「多様な子ども」という概念を、思考を誘発するための仮概念

として置いておきたい。モダニティにおいて、圧倒的な力で広がり実体化されていく理想・規範としてのある子ども観と、その横に並存する他の子ども観・年少者像（子ども観と呼べないかもしれないものも含めて）や、そのような子ども観からこぼれ落ちている現実の子どもたち（子どもと呼ばれない、呼びづらい場合も含めて）の関係を——葛藤や緊張、意図せざる共振・共犯関係を含んでいたり、すれ違ったり全く交わらなかつたりすることも含めて——もっと見つめてみる必要があるのではないだろうか。

3. モダニティの陰画としての新しい「子ども」の探求

拙著（元森 2014）では、戦前期日本の事例を取り上げつつ、これを、「子ども」の複層性」という（今となってはわかりづらかったと思う）言葉で述べている。モダニティが、一方で、「子ども」をめぐる一定のまとまり（一大複合体）をつくったことは疑いない。他方で、その周りには多様な子どもたちの現実と、子どもを子どもと見ない発想も含めた多様な年少者像が並存していた。前者を広げようとする動きと同時に、後者を自明とする世界が残り、そこには葛藤もあったのである。

加えて同書でもう一つ強調していることは、一大複合体の内部の子ども観も一枚岩かというとは必ずしもそうではないということである。まさにアリエスが近代家族的な「可愛がり」とモラリスト的な「激昂」として描き出し、カニンガムがルソーとロックをあげたように、規範・理想としての近代的子ども観自体が、必ずしも一つに収斂しない多様な要素をすでに含んでいる。教育実践をめぐる、統制と尊重、教え込みと児童中心主義、保護主義と責任主義、さらには、社会性と個性、秩序維持と発達援助というように、重なったり対立したりする様々な意見の提案が振り子のように繰り返され、何がより「子どものため」「社会のため」かが探られてきたのではないだろうか。振り子は、こぼれ落ちる層を包摂しようとする方向に振れたり、事実上、放置・排除する方向に振れたりもしている。

このことを強調するのは、日本においても、世界においても、近代的子ども観の乗り越えが強調されて久しいものの、提案されるオルタナティブがオルタ

ナティブになっているのかという問題を、研究者はもっと真剣に考える必要があると思うからである。

第二次世界大戦後、戦後福祉国家体制と経済成長により、多くの先進国で、理想・規範としての特定の子ども観が、社会の幅広い層に実態として広がっていく。象徴するのは高い就学率と就学期間の長期化であろう。その先に出てくるのが、この、規範として広がり遍く実態化したかに見える「子ども」観 (childhood) への反省である。

一方で、近代の行き着いた先に、現代の子どもたちが変容したという感覚が広がっていく。極端なものになると、家族の崩壊や、情報化社会の進展で、そもそも実態としての子どもたちが再び子どもらしくなくなっている、子ども／大人の境界が揺らいでいるという指摘が出てくる。「子ども時代を失った子どもたち (children without childhood)」(Winn 1984=1985)、「子ども期の消滅 (disappearance of childhood)」(Postman 1982=1984) といった議論がまことしやかに展開していくことになる。

他方で、そのような事態を帰結する、規範としての既存の子ども観——教育的子ども観や「発達」「社会化」などの概念——を批判し、それを乗り越えようとする動向が出てくる。イリッチ『脱学校の社会』(Illich 1971=1977) が世界的にヒットし、アリエス『〈子供〉の誕生』(Ariès 1960=1980) が近代的孩子観の歴史的相対性を周知していったように、近代社会批判と学校批判とを明に暗に含みながら、「学習主体」「エイジェンシー」「子どもの声」「子どもの権利」等の新たな子ども観や、子ども／大人の区分を攪乱する「生涯学習」等の諸概念が、オルタナティブとして提示されていった。子どものエイジェンシーと社会構造ごとの子どもの形式といった視点を強調する新しい子ども社会学も、広い意味でこの流れに含まれよう。

日本の子ども研究も、欧米の研究潮流との影響関係は限定的であったと思われるが、同時代的な時代背景の中で、似たような議論の軌跡をたどっているように思われる。日本の場合、高度成長期とほぼ並行して、後期中等教育のユニバーサル化を経験し、新卒一括採用や日本型雇用慣行・日本型福祉社会と呼ばれてきたようなしくみのなかで、家族・学校・企業のトライアングル（「日本型循環モデル」(本田 2014)）が、一律の就学・就労・結婚を前提とするライ

フコースの標準化・規範化を進めていった。「一億総中流」ムードの中で、ヨーロッパ的な階級という枠組みを社会の説明概念として活用せず、「単一民族神話」がコロニアル状況に由来するエスニシティの多様性を見えにくくした状況などとあいまって、規範・理想としての子ども観 (childhood) は、ヨーロッパ以上に均質的で、実態以上に広がったように感じられていたであろう⁽³⁾。

その先に、1970年代後半から1980年代にかけて、いじめや登校拒否が社会問題となり、遊び場やガキ大将を失い受験競争に追われる子どもたちの成育環境が問題視される中で、既存の子ども理解の枠組みを問い直す試みが同時多発的に起きている。教育社会学、児童文化論、歴史学、発達心理学、文化人類学、小児医学、建築・都市工学等が、同時多発的に子どもをめぐる既存の枠組みを反省し、協働するに至っている⁽⁴⁾。冒頭に述べたように、本学会の設立理念の核には、規範・理想として新たな子ども理解を探るベクトルと、現代社会における子どもたちの生活実態を探るベクトルが含まれていたが、同様に近代以前や近代化していない社会の子どもたちの姿を描き出そうとする実証志向のベクトルと、そこから近代社会にゆがめられていない「本来の子ども」の像を取り出そうとする規範志向のベクトルなど、いくつものベクトルのやや異なった研究関心が奇妙に合流し、子ども研究ブームのようなものを招来した時代があった。

これらが同床異夢の部分を持ちながらもつながれたのは、まさに1970年代後半から1980年代にかけての時代のムードを前提としてのことであろう。実際に行き渡ったと見える既存の(近代的)子ども観なるものを仮想敵として想定し、学校批判や近代批判の要素を多分に孕みながら、微妙に重なりきらないアプローチが、より「子ども(らしさ)」の本質や実態をつかみ、「子ども(らしさ)」に(おそらくは寄り添って)アプローチするためという共通枠で、ゆるやかにつながり、協働していった。

しかし、この同床異夢とも言える構図は、現時点ではきちんと問い直される必要がある。そもそも、世代が一巡以上し、この時代を「大人」として観察していない世代が中堅となり、生まれてもいない世代も続々と研究・実践側に参入している。「既存の子ども観」を問い直し、「子どもらしさ」へのアプローチを探るという問題意識でゆるやかにつながれるという感覚自体が、もはや共有

されづらくなっているのではないだろうか。

さらに、先述のプラウトが、「新しい子ども社会学」は、結局、子ども／大人、構造／エイジェンシーといった近代的二分法を再生産し延命してしまっていると批判しているが、大人の支配や社会による強制に、子どもの主体性を対置すること自体は新しいものではない。むしろ、20 世紀初頭の児童中心主義から、否、社会に自然児を対置したルソーから、繰り返されているとも言える。先述のように、こうして似た議論が振り子のように繰り返されることこそが、モダニティの特徴とも言える。そう考えると、近代批判、学校批判、社会変容といった点への関心と重なりつつ 20 世紀後半に興隆した「子ども」へのオルタナティブなアプローチの機運は、新たな子ども観を提案するものにしても、以前とは違う特徴を持つ子どもたちの世界に注目するにしても、必ずしも目新しいものとは言いきれない。むしろ、それ自体、モダニティに組み込まれたものなのではないだろうか。

同様に、近代的孩子観を共通の仮想敵に展開された日本の子ども研究の興隆についても、そこで提案されたオルタナティブがオルタナティブとなりえているのかという点をもっと議論されていいのではないだろうか。例えば、古式ゆかしいオルタナティブである童心主義については、それが大人の願望の押し付けだったと繰り返し批判されている⁶⁾。現時点ではもちろん、童心主義の陥穽を十二分に反省しながら新たな「子どもらしさ」へのアプローチが探られているが、それが大人（研究者）の思い込みでないか。また、子どもの視点や子どもの世界を見るという実態調査の目線が、このような願望と共振し、二分法を再生産してはいないか。モダニティと多様な子どもという論点と併せて、こういった「子ども（らしさ）」へのアプローチの試みが孕む危うさを視野に入れて、議論していく必要があるのではないだろうか。

4. 後期近代と多様な子ども

以上のような、振り子のように議論を繰り返しながら「子ども」を定義し処遇する一大複合体と並存する世界というモダニティと子どもの構図の捉え直しの先に、より複雑化する現在の問題も位置づけていく必要があるだろう。20

世紀末以降の現代を指すのに、さしあたり「後期近代」という、近代のプロジェクトの延長線上に生じた再帰的な状況を示す名称を用いておくのが無難だろう。ここまで見た、先進国で同時多発的に起きた、既存の近代的な子ども観への反省と新たな子どもへのアプローチの模索は、この近代の行き着いた段階での、新たな時代の予感を背景にしていよう。

後期近代において、「近代」の「社会」や「学校」や「大人」を、ある種の仮想敵として過度に画一的に描く傾向がある一方で、まさに、オルタナティブな「社会」「学校」「大人」の像が模索されることとなった。「グローバル化」「消費社会化」「情報化」などと呼ばれるようなモダニティの新段階にふさわしい人材モデルとして、多様性や個性を持った人材が要請されるようになる。日本の文脈だと、学校化批判の側面と新時代の人材養成の側面とをはらみながら成立したゆとり教育は、ひとつの象徴であろう。さらに、近代的諸価値の抑圧的側面への反省が生じ、科学的知見や哲学的考察を伴って、LGBTや発達障害等の新たに多様な生が発見され、認知されていく。子ども観自体を、規範・理想として、より多様なものしていこうという力学が生じている。

これらに並行して、低成長、グローバル競争の時代の趨勢として脱福祉国家化、新自由主義化が進められるなかで、国内およびグローバルな「格差」が進行し、ポスト冷戦期の国際秩序において国家を超えた人の移動が進み、それがまたグローバルな経済状況に組み込まれていく。実態としても子どもたち・子ども時代の多様化が進み、その一部は、典型的な近代的子ども期から突き抜けたグローバルエリートとして、一部は、典型からこぼれ落ちた社会的排除の事例として、発見される。

近代に埋め込まれていた「子ども」の複合体は、一方で、多様性 (childhoods) そのものを組み込みつつ拡大しようとしている。他方で、その拡大の境界で並存する世界 (childhoods) も発見され続け、包摂か排除かの方策が探られ続けている。

ここで考慮に入れねばならないのは、諸事象が緊密に結びついた後期近代においては、こぼれ落ちる子どもたち、子ども時代を持たない子どもたちを、安易に——ときにノスタルジーの対象として⁽⁶⁾——放置することも選択しづらい現状があるということである。今や、対抗言説の主流は「脱学校」ではない。「ケ

イパビリティアプローチ」(セン)などが称揚されており、子ども時代の安全・衛生、健康、十全なる養育、そして教育こそが、ライフコースが多様化し、グローバルに連鎖する諸事象によって不確実性が増す未来を生きぬくための、セーフティネットと見なされている。国際機関やグローバル NGO が、各国政府や NPO が、多様な子どもたちがなるべく理想・規範としての近代的孩子期からこぼれ落ちないように網の目を張り巡らせ、国民国家やグローバル社会におけるキャリアのはしごを用意ようとしているのである。あえて、近代的な規律訓練を重視するようなプログラムや、ある範囲で多様性を取り入れた新たな「子ども」像を提案するプログラムも、次々と生み出されている。これらの包摂の試みを、その功罪両面から検討していく必要もあろう。

すなわち、一方で、現実としての画一化(近代的孩子観の浸透)に抗して、理想としての多様性が提唱され、他方で、現実としての多様化に抗して、理想としての画一化(近代的孩子観の再定義)が志向されている。この力関係のなかで、子どもたちはどのような子ども時代(childhoods)を生きているのか。どのような互いに矛盾するような子ども観(childhoods)があるのか。オルタナティブとして次々と提案される子ども観に、モダニティの「子ども」につきものの議論の振り子の問題(アポリア)は生じないのか。さらには、そのような子どもたち(children)をどう捉えたらよいのか。このような水準での「子ども」とは何で、「子ども」にアプローチするとはいかなることかを問うていく必要があるのではないか。

5. 多様な子どもの諸断章——本特集の構成と展望

本特集の4つの論考は、それぞれに昨今の「多様な子ども」をめぐるテーマを取り扱っている。

針塚瑞樹論文は、教育人類学の立場から、長らくノンフォーマル教育という形で多様な子ども期を温存していながら、現在まさに正規公教育と近代的孩子期の浸透が企図されつつあるインドを取り扱う。植民地期の教育の遺産の上に成り立つノンフォーマル教育の事例は、モダニティの力学のそれこそ多様な現象の仕方の一つを見せてくれると同時に、再度グローバルなモダニティの力

学に巻き込まれる現状に注意を促してくれる。

渋谷真樹論文は、異文化間教育学の立場から、グローバル化の進む時代の多様な子どもたちのライフコースを、実際の教育プログラムと教育資格（学歴）に落とししていく試みである国際バカロレアの事例を考察している。実施校の調査から明らかにされるいくつかの葛藤の局面は、実態としての文化的多様性と、プログラムが目指す国際的視野の育成という価値としての多様性とが、必ずしも直線的に結びつかないことを、コスト等の現実的な論点と共に見せてくれる。

伊藤秀樹論文は、生徒指導論の立場から、PBS(Positive Behavior Support)を事例に、一人ひとりに寄り添うことと多様性の尊重とのアポリアを描き出している。多様な生徒が包摂された（されることを規範とする）現代の学校において、生徒指導を要する生徒の抱える問題は多様である。そのなかで、個々の事情や背景を踏まえることが強調される一方で、指導基準の統一の必要性が要請されてしまう。このダブルバインド的な要請の中で、生徒指導がどこまでの多様性に取り組めるのかという論点が見えてくる。

鶴田真紀論文は、社会構成論の視点から、発達障害児の語られ方における「子どもらしさ」と「多様性」の緊張関係を描き出している。近代公教育制度を前提としたライフコースが浸透するなかで、発達障害は、その挙動特性ゆえに、「子どもらしい」のか、そこからの偏差なのか、どちらともとれる「気になる子」として可視化されてきた。長らく統合教育か分離教育かを論じてきた障害児教育の領域は、「通常教育における特別な支援のニーズ」という形で、いわば「子ども」像を拡張・再定義し「通常」へと包摂する形へと落ちていたが、この微妙な包摂のありようは、現場の混乱やより深刻なケースをめぐる葛藤などの問題を残していることに思い至らされる。

これらの4つの論文は、それぞれに異なった地域や領域を扱っている。しかし、通読して見えてくるのは、後期近代において、従来放置されたり別扱いされたりしてきた実態としての多様な子どもたちを、教育（そしてその後のキャリア）に包摂しようという動きが様々に起きているという事実であり、そうしたときに、一方で、規範・理想としての子ども観を更新していこうという動きが生じつつも、他方で、近代的孩子観につきもののアポリアにそれぞれの形で巻き込まれざるをえないという、緊張関係をはらんだ現在進行形の事態であ

る。

今回は、社会科学系の執筆陣、学校教育制度に関わるテーマとなったが、それこそ多様な時代や場所、教育以外を含む多様な領域の子ども (childhoods, children) に取り組んだ研究もありえる。個別の検討をゆるやかな枠組みで共有して議論を重ねていく中で、「子ども」と「子ども」へのアプローチの歴史的・同時代的見取り図が、本稿で仮説的に論じたより具体的な輪郭をもって見えてくるのではないだろうか。もちろん、多様な子どもを記述するための方法論的な議論も必要であろうし、別のディシプリン、別のアプローチからの応答・批判も期待したい。

いずれにせよ、「子ども」の多様性——より正確に言い換えれば複数性——を前提に、「子ども」とは何か、「子ども」にアプローチするとはいかなることかを今一度問うていく作業は、平等や人権とは何か、成熟・自立とは、社会とは何かという、「子ども (／大人)」を含む近代的価値を問い直し、場合によっては立て直す作業を不可避に含むことになる。本企画が、そのための一歩になればよいと考えている。

注

- (1) 第 22 号の特集をレビューした麻生 (2017) は、ここにあげたような、各論文のアプローチの違いを、「“イデア”としての子ども」「“実在”としての子ども」「“関係性”としての子ども」という名称で整理している。このなかで、筆者の視角は「“関係性”としての子ども」に分類されているが、本号の特集自体が、そのような関係論的視点で構想されていると言える。なお、同論文が加えた別の整理の 2 軸、「見えるもの」と“見えないもの”「構築 (制度の改革) と脱構築 (制度の相対化)」については、筆者はつかみかねているが、本稿 3 の既存の視角の隘路に対する問題提起の箇所、論理的には対極にあるはずの関心をぐにやりと結びつけながら展開されてきた子ども研究の様子を描いているのが、論点として関係するのではないかと推測している。
- (2) 同様の関心から、欧州の子ども社会学を参照しつつ、日本の教育社会学の子ども研究のレビューを行った元森 (2018) も併せて参照されたい。
- (3) 一例にすぎないが、元森 (2016) では、規範としての子ども期が実際にも浸透したと見なされていく中で、実態としては消えきったわけではない子どもの貧困が、教育言説上から消えていく様子を示した。
- (4) たとえば、『子どもの文化人類学』(原 1979) の試みを嚆矢として、文化人類学者たちによって『世界の子どもの文化』(岩田編 1987) が紹介され、その姿に『子ども文化の原像』(岩田編 1985) が探られていった。児童文化論では、子どもたちを大人に従属するものと見るのではなく、『異文化としての子ども』(本田 1982) を見よう、大人たちを『挑発する子どもたち』(山口編 1982) として見ようという提案が、人類学と交錯しながら出てくる。また、教育社会学や児童文学と重なりつつ、「遊び」や「ファンタジー」に注目した子どもたちの世界を明らかにしようという

モダンティと複数形の「子ども」
 一特集「「子どもらしさ」へのアプローチ3 「多様な子ども」のねらいに代えてー

動き(古田 1982; 藤本 1985)もあった。歴史学・思想史では、アリエスらの社会史を受けて、ヨーロッパや日本の近代以前の子どもの姿を描いたり、近代的な子ども観の登場を思想的にたどり直したりする営みがさかんになった(たとえば森田 1986; 宮澤 1998)。教育社会学では、子どもたちの世界を明らかにするための質問紙調査の試みが、福武書店(ベネッセ)『モノグラフ』シリーズ(深谷昌志)や、東京都子ども基本調査(門脇厚司)、子ども集団の研究(住田正樹)といった形で展開していった。発達心理学においては、『反発達論』(山下 1977)が提起され、乳幼児死亡率の極小化に成功した小児科からは、社会心理的要因に踏み込んだ子どものケアのための学際的『子ども学』(小林ほか編 1985-86)の構想が出てきた。「子ども社会学」のほかにも、「子ども学(チャイルドサイエンス)」「日本子ども学会」、「こども環境学」(仙田満、こども環境学会)等の学際学会に結実するような、学問越境的な協働や学際的学問構築の試みが多くなされた。

- (5) 同時代的な批判としては、上田(1929)など。また、佐藤(1959)の批判は有名である。
 (6) 1980年代日本の子ども研究には、明らかにその傾向があった。また、アリエスの研究視角に、どこかでアンシャン・レージュム期へのノスタルジックなまなざしが感じられるように、多様な非近代的子ども期のあり方は、近代的子ども観を逆照射するきっかけとして道具的に見出される傾向が、日本に限らず存在したように思われる。

文献

- Ariès, P. 1960 *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Plon, (アリエス、杉山光信・杉山恵美子訳 1980『〈子供〉の誕生：アンシャン・レージュム期の子供と家族生活』みすず書房)。
 麻生武 2017「「子ども」という鏡：特集「子どもらしさ」の五論文を読んで」『子ども社会研究』第23号, pp.5-22。
 Cunningham, H. 2005 *Children and Childhood in Western Society Since 1500* (2nd ed.), Pearson Longman, (カニングガム、北本正章訳 2013『概説 子ども観の社会史：ヨーロッパとアメリカからみた教育・福祉・国家』新曜社)。
 Donzelot, J. 1977 *La police des familles*, Éditions de Minuit, (ドンズロ、宇波彰訳 1981『家族に介入する社会：近代家族と国家の管理装置』新曜社)。
 藤本浩之輔 1985「子ども文化論序説：遊びの文化論的研究」『京都大学教育学部紀要』第31号, pp.1-31。
 古田足日 1982[1997]『子どもと文化』久山社。
 原ひろ子 1979『子どもの文化人類学』晶文社。
 本田和子 1982[1992]『異文化としての子ども』筑摩学芸文庫。
 本田由紀 2014『もじれる社会：戦後日本型循環モデルを超えて』ちくま新書。
 Illich, I. 1971 *Deschooling Society*, Penguin, (イリッチ、東洋・小澤周三訳 1977『脱学校の社会』東京創元社)。
 岩田慶治編 1987『世界の子どもの文化』創元社。
 岩田慶治編 1985『子どもの文化の原像：文化人類学的視点から』日本放送出版協会。
 小林登ほか編 1985-86『新しい子ども学 1-3』海鳴社。
 宮沢康人 1998『大人と子供の関係史序説：教育学と歴史的方法』柏書房。
 森田伸子 1986『子どもの時代：『エミール』のパラドックス』新曜社。
 元森絵里子 2014『語られない「子ども」の近代：年少者保護制度の歴史社会学』勁草書房。
 ———— 2016「大人と子どもが語る「貧困」と「子ども」：どのようにして経済問題が忘れられていったか」相澤真一ほか『子どもと貧困の戦後史』青弓社, pp.133-162。
 ———— 2018「子ども観の変容と未来：子どもの多様性の発見の時代、子ども社会学は何を問うべ

- きか」日本教育社会学会編（稲垣恭子・内田良責任編集）『教育社会学のフロンティア 2：変容する社会と教育のゆくえ』岩波書店，pp.189-208.
- Postman, N. 1982 *The Disappearance of Childhood*, Delacorte Press, (ポストマン、小柴一訳 1985 『子どもはもういない：教育と文化への警告』新樹社) .
- Prout, A. 2005 *The Future of Childhood: Towards the Interdisciplinary Study of Children*, Routledge, (プラウト、元森絵里子訳 2017 『これからの子ども社会学：生物・技術・社会のネットワークとしての「子ども」』新曜社) .
- 佐藤忠男 1959 「少年の理想主義について」『思想の科学 第4次』第3号，pp.15-31.
- 上田庄三郎 1929 「教師への降伏状としての綴方」『綴方生活』第1巻第1号，pp.40-43.
- Winn, M. 1983 *Children without Childhood*, Pantheon Books, (ウィン、平賀悦子訳 1984 『子ども時代を失った子どもたち：何が起きているか』サイマル出版会) .
- 山下恒夫 1977[2002] 『反発達論：抑圧の人間学からの解放（新装版）』現代書館 .